

続
花火



続

花

はな

時代

いかな



はじめに。

第一句集「花筏」を上碎して早くも四年の歳月が過ぎ時の流れの早さに驚いております。又今年は東日本大震災があり、心よりお見舞いと哀悼の意を表します。

私たちの俳句は一步一步のか弱い歩みですが、被災された方々もどうか確りと前を向かれて、力強く一步一步復興に歩まれます様に微力ながら応援していきたいと思ひます。

「健康な人には病気になる心配があるが、病人には回復すると言ふ楽しみがある」と物理学者の寺田寅彦さんが言われた言葉があります。まだまだ大変な事だと思ひますが、復興と言ふ楽しみを噛みしめて行かれます様に、心からお祈り致しております。

「花筏」として流れのまにまに、この先も淀みに浮かぶのか沈むのか、流されるのか、一寸先もわかりません。でも、命の限り自分らしく、心に響く句を表現して参りたいと思ひます。

“行く川の流れのまゝに花筏”

「月日は百代の過客」と古人も言われた様に、出会いや別れをこれからも幾度重ねて行く事でしようか。神様から与えられた喜びや悲しみを、俳句を通じて心のなかに止めて参りたいと思います。

お陰さまで傘寿を記念して第二句集を出せることは、良き友人や良き句仲間に支えられての事と、感謝の気持ちで一杯です。

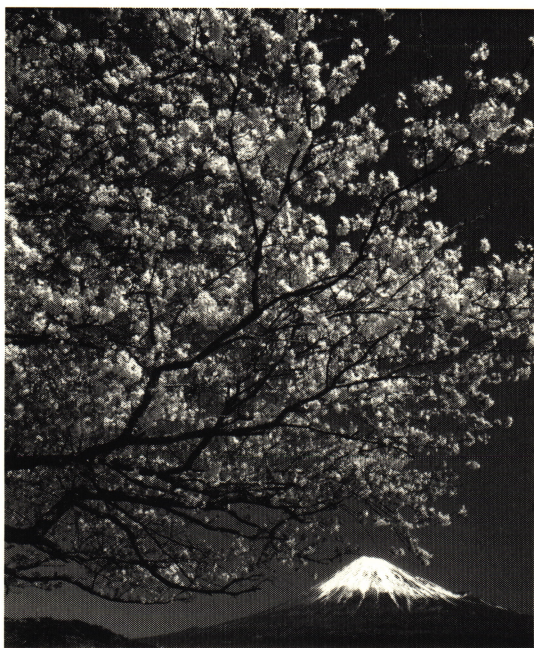
又この度は、太田那武先生亡き後、私達の句会を支えて下さっている高橋孤星さんに跋文をお書き頂き心より感謝申し上げます。

平成二十三年五月吉日

静岡県富士市鈴川中町二十一の六

城所愛子

春



東の間の陽に香り立つ路の臺とう

夜桜の散る一枚の吐息かな

見舞ふたびつき通す嘘春寒し

白球を追ふやコートの花の舞

春分や大浪小浪の姪看とり

でで虫の一步のあゆみ時流る

西行の歌は
ずさむ花の中

日曆を忘れ
しままの花
疲れ

紫の小花咲き出ず仏の座

げんげ田の色惜しみなく鋤^{すき}込まる

点滴の一滴遅く春浅し

潮の香や澄ませし耳に笹子鳴く

こぼれ咲く乙女椿や老二人

賜りしワインの香る春宴

海鳴りや立浪草たつなみそうのこぞり咲く

琴の音に桜舞い入る師の庭辺

散りいそぐ花一瞬を躊躇ためらわす

晴れ渡る鳳凰三山雪解ゆきげ風

きよ里の閑けさ深く枳の花

ゆすら梅啗みて青春蘇える

媼おうならの茶摘女となる日
和かな

若葉映ゆ平和行進
右左みぎひだり

昏れなんと背音たかむる花あやめ

送られし若布わかめに深き潮うしおの香

千の枝川面染め入る桜かな

花満ちて午後の日差しに華げり

薰風やペダルで伴奏子等走る

ソバージュの髪形ふわり春の雲

若葉光目蓋重げの六地藏

行く川の流れのまゝに花筏

夏



送り日の終の一点闇深し

大文字焼あの世かの世の境かな

吊り橋や止りて聞くや老鶯

面影の生きる妹や盆の富士

共に生き夏越なごしの祓はらい受けにけり

うりずんや珊瑚の海の鬼いとぞ

大花火海なる星の珊瑚礁

祭り終えかがり火一つ川面揺れ

梅雨晴れ間膝下にお在す逆富士

梅雨明けの確かな空や碧き海

小判草吹かれて鳴るや野の小径

かなかなの朝より鳴くや山の宿

梅雨明けや青天を切る飛行雲

山藤のゴンドラかける溪たに深し

かぐや舞ふ白き十指の眩しかり

つりしのぶ
吊忍葉裏返して風の道

「お先に」と一声残し晩夏光

かぐや薔薇^{ばら}白と言えども紅ほのか

旬ぐころの遠ざかりて水無月

ハの字の茅らの輪くぐりに願をかけ

貝母百合ばいも絵筆の先に揺らぎけり

リラの咲く姉の忌日の近づけり

笹の葉の影の重さや鬼やんま

夕光ゆうかげに藤房いよよ艶めけり

峠路やかなかの鳴く風貫ふ

紅蓮や葉波の先の弁天堂

野仏の供華のごとくや松虫草

空眺め終戦の日や父偲ぶ

先輩の弾む会話や茄子の花

香り満つうつぎ空木の花や無人駅

秋



さんま焼くだけの七輪出しにけり

路地裏のすき抜け来たる風は秋

今一度聞きたき「トスカ」星月夜

不揃いの三色おはぎ供華とせり

掃き寄する程の空蟬掌にかろし

咲ききつて思い残さず吐ほととぎす鶉草

たおやかに千年を祝ほぐ式部の実

はまなすやなごりの一花啄木碑

白穂の生誕の碑や柿たわわ

白隠の産湯の井戸や花芒

酈^{さわし}柿供へ亡き母思ひけり

みはるかす羊蹄山の雪少くな

足早に昏るるコテージ紅葉冷

一絃の琴の音色や楓燃ゆ

コンサート北の大地や秋日和

背のびして天に熟れたる柿をもぐ

ミサ曲の透き通る秋神讃ふ

車窓より大きな秋虹大沼公園

しゅうこう

仰ぎ見る摺鉢の松天分つ

(原の白穩禪寺の寺)

函館の空港の灯や秋惜しむ

コテージの賑ふ洞爺ナナカマド

天仰ぎルビーの煌めき山ぼうし

学窓の銀杏もみじ黄葉や時刻む

渋滞の先の紅葉や渡月橋

すすき野に風の一吹き波渡る

野に満てる曼珠沙華や光り含ふ

紅白のもたれ合ふごと水引草

「無言館」出づるや紅葉舞ふばかり

一族の揃いたるごとく曼珠沙華

仰ぎ見るステファン教会天高し

冬



初日の出伊豆の大地の鼓動かな

光彩の波穏やかに明けの春

七草のきざむリズムに妣ははの声

初富士やきらりと朝の日矢を受け

燦々と富士染め上げぬ初御空^み

初髪を結ひし娘のうなじかな

一人観る玻璃戸はりど越しなる寒の月

雪富士を背びらに地藏赤帽子

絵手紙の蕊しべ振るわせて寒牡丹

薄氷うすらいのゆるむ水辺に雀どら

旅立ちの心弾むや冬帽子

エーローの便い初めは毛糸帽

シャガールの赤にときめく冬夕焼

焼きたての露店のワッフル冬ぬくし

悴^{かじ}みて凝視や姪の診断書

天辺の達磨呑み込むどんだの火

白梅のまばゆきまづに空の碧

咲き初めし梅一輪の紅の濃さ

白梅にもたれて咲くや紅枝垂

春疾風^{はやて}防^は災^やの叫^{こゑ}びらぎれ飛ぶ

土塊くれを押し上げてゐし今朝の霜

電線に鳩群むらりぬ冬日和

雪の朝「あうん」で翔つや番鳥つかいどり

小豆粥福餅一つしのばせて

第九終へ仰ぐオリオン光美し

シャツ一枚脱いで小春の縁將棋

窓越しの冬満月を惜しみけり

筆勢の迸ほとばし出ずる金目鯛

初日の出八十路やそじの坂を上りけり

共に生き米寿傘寿の初詣

蹲鋸つくばぬの

柄杓に残る

薄氷り



跋文

第二句集刊行誠におめでとうございます。

永年の努力の結果として、自選句集を発行されます事は真に喜ばしいことです。

私と愛子さんとは平成三年より太田邦武先生に師事しております。師の亡き後も同じグループの句会で勉強中です。

愛さんは感性にめぐまれ、多くの秀句を詠まれています。まさに継続は力なり！だと思います。

今後也大いに感性を磨き、心に沁みる句を詠まれんことを期待致します。

「陽をばじく強々増したり柿若葉」

平成二十三年五月吉日

高橋孤星

